岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第 16 号 2014 年 3 月
Bulletin of Morioka Junior College Iwate Prefectural University, No.16
31-36, March 2014

研究報告

岩手県のラグビー(1)

岩手県のラグビーの歴史的動向

Concerning Rugby Football in Iwate Prefecture (I)
Historical Reviews of Making Rugby Football Teams in Iwate Prefecture

原　英子*
Eiko　HARA

Keywords: *Rugby football in Iwate Prefecture, Historical Movement, Distinction of Locality in Iwate Prefecture,*
岩手県のラグビー、歴史的動向、岩手県の地域性

はじめに

日本のラグビー界は 2019 年におおきな世界的イベントを迎える。ラグビーワールドカップである。2014 年には、国内開催地の選考がすすみ、15 年には発表される予定である。国内開催地が決定されると、それへ向けた準備が大きく進められていくことが予想される。また、翌 2020 年には東京でオリンピックが開催されることが決定している。ラグビーも 2016 年のリオデジャネイロオリンピックから正式種目として採用される。この年、岩手県では、国体が開催される。

1970 年、岩手県で国体が開催された。これは岩手県のラグビーに大きな影響を与えた。この 70 年には新日鉄釜石が社会人ラグビーで優勝し、76 年から続く日本一 7 連覇を生み出すことになったのである。高校では、70 年に盛岡工業高校が全国ラグビー大会で優勝した。また、国体によりラグビー競技者の裾野が広がった。高校ラグビー部が新たに創部され、各地に小学生のラグビースクールが開設した。国体は不惑チームが誕生するきっかけともなり、ラグビーが生涯スポーツとなっていった。

これからのビッグイベントを控え、岩手県のラグビーは現在どのような状況にあるのだろうか。本稿では、1927（昭和 2）年に始まった岩手県下のラグビーの歴史を整理しながら、岩手県のラグビーの動向をみていき、その地域性にも言及したい。

1.　岩手県のラグビーの歴史的動向

岩手県のラグビーはどのような変遷を経て今日にいたっているのであろうか。岩手県ラグビーフットボール協会は、1980 年に岩手県ラグビーの 50 年史で年表を作成した。これをもとにラグビーチーム創設に関する時間的な経過を整理することで、岩手県のラグビーチームができる歴史的傾向をみていきたい。

岩手のラグビーの時代的区分は、『岩手のラグビー五十年史』（以下 50 年史と略す）をみると、以下のような区分となっている。まず、岩手にラグビーが導入された昭和初期（1920 年代後半）を「黎明期」とする。そして、戦後ラグビー人口が増加した 1940 年代後半から 50 年代前半が「興隆期」。そのあと 1960 年代前半の「黄金期幕開け」という時代があり、1970 年代後半からはじまる「黄金時代」。そして新日鉄釜石の活躍がはじまったころ、50 年史がつくられ、「50 周年の結実」となっている。その後については、1999 年に編纂された『岩手県ラグビー70 年記念誌』をみると、このときのタイトルが「復活を目指して 1979~1998」、『岩手県ラグビー80 年記念誌』では「初心にかえり挑戦　1999~2007」となっている。それぞれの記念誌につけられたタイトルも、それが編纂された時代をあらわしている。

これらの記念誌にはそれぞれ岩手県のラグビー年表が掲載されている。年表のなかから特にラグビーチームの創設をとりあげてみると、おおまかに次のような傾向がみられることがわかった。第一に、ラグビーチームが多く創設される時期がいくつか存在することである。そして第二に、同じ時期にできたチームの同種性である。つまり、ラグビーチームの成立を、年表からひろっていくと、ある時期に、同種のチームがいくつも編成されている。そこでこうしたグループを、時代別にとりあげていくことにする。

ところで、50 年史を丹念にみていくと、必ずしも年表上にすべてのチームの設立時期が記されているわけではないことがわかる。おそらく 50 年史作成当時に、記録が確認されなかったチームなど、記載されなかった可能性が考えられる。そうした面は認められるものの、50 年史をはじめとする 70 年史、80 年史といった『記念誌』に掲載される年表を資料に岩手県のラグビーの歴史的動向を振り返ることは重要な意味を持つと考えられ

*国際文化学科

る。以上のことから、本稿では、50 年史等の『記念誌』の年表を主たる資料として整理してみる。その結果わかったチームの創立時期とそのグループの特徴を以下に示していく。

(1)　＜1920 年代＞中学校・医科専門学校での創部

岩手県のラグビーは、1920 年代後半に黎明期を迎える。日本体育大学から岩手中学に来た広嶋英雄が、1927 年に、岩手中学の体育の授業としてとりいれられたのである。これが岩手でラグビーをおこなった最初とされている[岩手県ラグビーフットボール協会 1980 : 190]。翌 1928 年には岩手医科専門学校と盛岡中学にラグビー部が創設された。創部した年の 10 月には、これら 2 校の間で試合がおこなわれた。これが岩手県初の公式試合だとされている[岩手県盛岡一高ラグビー部 70 周年記念誌編集委員会 1998:12]。そのわずか 5 年後の 1933 年、岩手医専は東北 7 人制ラグビー大会で準優勝した(1)。

近代スポーツとしてのラグビーは、イギリスのパブリックスクールでジェントルマンになるための理念を基礎において発展してきたといわれるが、岩手県においても、戦前、まずは（旧制）中学校や医科専門学校といった学校の教育現場にラグビーが導入されたのである。

(2)　＜1930 年代＞実業団チームの創設

1930 年代末になると、実業団チームが創部された。岩手県下に散らばっていた電力会社は、合併などを繰り返し、1938 年に奥羽電灯となった。このときラグビー部が創設された(2)。現在の東北電力である。1939 年には硫黄の産出を主とした松尾鉱山にもラグビー部できている(3)。翌 1940 年には国鉄盛岡工場にもラグビー部ができた[岩手県ラグビーフットボール協会 1980 : 53, 190]。翌年、1941 年に太平洋戦争が開始されたので、実業団チームができたのはそれ以前のこととなるが、電力、硫黄、鉄道といった国の政策と大きなかかわりあいをもつ産業にラグビーチームが創設されているのをみることができる。

(3) ＜1940 年代＞戦後の高等学校でのチームの創設：高校での第一次ラグビー部創部期(4)

1945 年に終戦を迎えたあと、1947 年には戦後の学制改革がおこなわれ、新制の高等学校がつくられはじめた。早いものは 1946 年、戦後の高等学校で、ラグビー部が創られている。これ以後、岩手県各地の高校で次々とラグビー部が生まれた。この時期にできたラグビー部をつくった高校を、年ごとにまとめたのが表 1 である。

表 1 をみると、1947 年に 4 校、49 年に 5 校でラグビー部をつくっているのがわかる。のちにも高校でラグビー部が創られた時期があるので、これとくべつするために、この時期を便宜上、「高校での第一次ラグビー部創部期」と呼んでおこう。

表 1　戦後岩手県下のラグビー部創部高校

(年)	高校名
1946	盛岡工業高校
1947	黒澤尻北高校、黒澤尻工業高校、 宮古高校、一関一高
1948	
1949	岩谷堂農林高校、水沢高校、盛岡農業高校、平舘高校、宮古水産高校
1950	和賀高校

[岩手県ラグビーフットボール協会 1980 : 191-93]より作成

この「高校での第一次ラグビー部創部期」は、戦後の新制高校で、ラグビーによるスポーツ活動が開始される一方で、学制改革により、戦前の高等専門学校等が、新制大学へ組み入れられた時期でもあった。岩手県でも、工専、農専、師範学校が岩手大学に統合され、1950 年には岩手大学ラグビー部ができている(5)。

(4) ＜1960 年代＞高校での第二次ラグビー部創設期：第一次ベビーブーム期

表 2　1960 年代岩手県下のラグビー部創部高校

(年)	高校名
1963	宮古商業高校、久慈農林水産高校
1964	専修大学北上高校、釜石北高校、水沢第一高校
1965	
1966	岩谷堂高校、一関工業高校、釜石工業高校、福岡工業高校

[岩手県ラグビーフットボール協会 1980 : 196-97]より作成

表 2 にみるように、1960 年代になると再び高校にラグビー部が多く作られるようになった。1963 年に 2 校、64 年に 3 校、66 年に 4 校にラグビー部がつくられた。この時期的は、戦後の第一次ベビーブーム期に出生した子どもたちが高校に進学した時期である。

(5) ＜1970 年代＞岩手国体の影響

1970 年に第 25 回岩手国体が開催された。この国体は岩手県のラグビーに大きな影響を与えている。ひとつには、岩手国体で競技役員として参加したかつてのラガーたちが、東京不惑を参考に 1971 年に不惑チームを結成したことである[岩手県ラグビーフットボール協会 1980 : 129-30]。また岩手県内のラグビースクールも、国体開催前後に多数つくられた上に、スクールに中学部もつくられることになった。また、このころ新たにラグビー部をつくった高校

もあった [岩手県ラグビーフットボール協会 1980：198-99, 1999:121]。

このように、1970 年に開催された岩手国体は、高校、社会人といった競技メインの年齢層で競技人口を増加させただけではなく、その前後の年齢層の人々にラグビーをする機会を大きく提供することで、小学生から高齢者までのあらゆる年齢層を取り込んだスポーツへと展開していくことになった。

国体が開催された 1970 年、岩手県のラグビーが全国的にもレベルアップしていることを示す大会がふたつあった。ひとつが 1970 年 12 月 30 日から 71 年 1 月 6 日にかけて東京で開催された第 23 回社会人ラグビー大会で、ここで新日鉄釜石チームが優勝したのである。そして、ふたつめが、まさに日にちを多少たがえるだけの日程（1970 年 12 月 31 日から 71 年 1 月 10 日）で、花園でおこなわれた第 50 回全国高校ラグビー大会である。この大会で盛岡工業高校が優勝したのである。まさに社会人と高校の両者が全国優勝を獲得したのである。翌 1972 年におこなわれた第 26 回和歌山国体でも、新日鉄釜石と高校全岩手が優勝し、天皇杯総合 1 位を獲得している[岩手県ラグビーフットボール協会 1980：198-99]。

1970 年代は、こうした全国レベルで優勝を争えるチームを排出する一方で、新規の高校ラグビー部の参入や、子どもたちのラグビースクールが充実していった時代ともいえる。

(a)高校での第三次ラグビー部創設期

1970 年に第 25 回岩手国体が開催された。こののち 1970 年代に再びいくつかの高校でラグビー部がつくられた（表 3）。1970 年の水沢工業高校、水沢農業高校をはじめ、72 年には盛岡三高、釜石南高校、大東高校の三校で、73 年には宮古工業高校に創部された。

表 3　1970 年岩手国体前後期における高校での第三次ラグビー部創設期

(年)	高校名
1970	水沢工業高校、水沢農業高校
1971	
1972	盛岡三高、釜石南高校、大東高校
1973	宮古工業高校

[岩手県ラグビーフットボール協会 1980：198-99]より作成

ラグビー部創設は、1940 年代後半の第一次創部期、60 年代前半から中盤にかけての第二次創部期、そしてこの 70 年代前半の第三次創部期と、全部で３つの時期に集中して創部されている。

(b)ラグビースクール

岩手で国体が開催される前年の 1969 年に盛岡ラグビースクールがつくられた。東北・北海道地区で最初のラグビースクールであった[岩手県ラグビーフットボール協会 1999：62]。

その 5 年後、1974 年に北上ラグビースクールがつくられた。ラグビースクールも 75 年には沿岸部の大船渡ラグビースクール、釜石ラグビースクール、それに宮古ラグビースクールと 3 か所につくられた。その後 1976 年に都南ラグビースクール、79 年に水沢ラグビースクール、80 年に久慈ラグビースクールがつくられた(6)[岩手県ラグビーフットボール協会 1999：62]。

上述のように 1970 年代前半には、沿岸部の高校でのラグビー部新設をはじめ、70 年代半ばに大船渡、釜石、宮古という沿岸部の拠点に子どもたちのラグビースクールが開設された（表 3）。70 年代は、1970 年の新日鉄釜石の社会人ラグビーフットボール大会での優勝、76 年の日本ラグビーフットボール選手権大会優勝による日本一など、のちに 7 連覇へとつながる新日鉄釜石の躍進がすでに始動しており、「子どもたちのラグビーへの夢がひろがっていった」時期だったのである[岩手県ラグビーフットボール協会 1999：62]。

(6)　＜1978-1984 年＞**新日鉄釜石 7 連覇**

1970 年代前半に、高校のラグビー部の全国大会での活躍や社会人チームの活躍が目立つ一方、小学生、中学生のラグビースクールの創設をはじめ、不惑チームの創設など、ラグビーをする年齢層の拡大がみられたことは上にみてきた。幅広い年齢層で、競技人口が増加してきたという競技背景があって、1970 年代後半から 80 年代前半にかけ、新日鉄釜石の黄金時代が到来した。1979 年から 84 年にかけて日本ラグビーフットボール選手権での優勝という日本一 7 連覇を達成したのである。ラグビーの頂点を 7 年間維持し続けた背景のひとつに、岩手県や東北地方のラグビー競技をささえる競技者の層の厚さがあった。

それは、その後神戸製鋼も 7 連覇を果たしたが、神戸製鋼と新日鉄の違いとして、現在もしばしば人々の口にのぼる。特に東日本大震災以降、岩手や東北の高校生たちがつくった地域のチームであったことが、強く意識され、被災地の未来を語るときに、振り返る過去の原点のひとつとなっている。それほど強力な影響を地域民に与えることになった出来事である。

1976 年 4 月から 1981 年まで監督をし、7 連覇の最初の 3 連覇を導いた小藪修は、当時のチームの状況を次のように語っている。

> 当時、釜石ラグビー部の部員構成は、大学卒が 3 名程度で、ほとんどが、地元岩手県、そして秋田県、青森県、北海道の高校卒の選手を主体としたチームであった。
>
> 東北地区は高校ラグビーが強く、特に岩手県の盛岡工業、黒沢尻工業や秋田県の秋田工業等、東北を制するチームが全国大会も制すると言われる位レベルも高く、い

い素材の選手も多かっただけに、育てる者の楽しみもあった。

又、ラグビーチームを強化する上において、東北という地は、地域の理解、良き指導者（先生）、選手の質に恵まれていた。

[小藪 1999：83 頁]

小藪の言は、地元岩手の充実とともに、東北・北海道地方の高校ラグビーの層の厚さがそのまま新日鉄釜石の強さにつながっていたことを語っている。そして、それは地域の理解、良き指導者の存在があってのことで、そうした地域理解や良き指導者を生み出してきた過去のラグビーの歴史の結実だという実感があったことがわかる。

この小藪の思いは、現在の釜石シーウェイブスファンにも伝わっている。特に東日本大震災以降、釜石や地域、東北の「絆」に思いをよせるとき、新日鉄釜石の栄光とともに、地元岩手や東北出身者から成るチームであったことが誇らしげに語られているのだ。新日鉄釜石の 7 連覇は、過去の歴史的記録ではなく、現在にも影響を与え、人々の地域アイデンティティのよりどころとなった出来事だとみることができる(7)。

(7)<1980 年代後半以降>

新日鉄釜石の 7 連覇が終わったのち、1980 年代後半以降は、新たに創部されるものもある一方で消滅していくクラブもみられた。たとえば盛岡市のラグビーフットボール協会にはラグビー黄金時代には 30 チームが所属していたが、2008 年には 12 チームとなった[岩手県ラグビーフットボール協会 2008 : 115]。こうした動きをみるうえで、岩手県内のラグビースクールの動きを取り上げてみる。

(a)ラグビースクールの変遷

ラグビースクールが創設年と活動休止について上述の(5)(b)であつかったものも含めて表 4 にまとめてみた[岩手県ラグビーフットボール協会 1980,1999,2007] (8)。

新日鉄釜石の日本一が続いていた 1980 年まで、岩手県内のラグビースクールは 8 つを数えた。その後 10 年ほど変動がなかったようだが、1991 年に一関にでき、これは 2008 年まで続いた。1999 年には胆江ラグビースクール、2000 年には紫波ラグビースクールができた。2004 年には滝沢ラグビースクールができ、2005 年には矢巾ラグビースクールができたが、矢巾は 2011 年に休止となっている。

ラグビースクールの休止と廃部の時期は確認が難しい場合が多かった。1975 年にできた大船渡ラグビースクールの場合、ラグビースクールの大会記録をめくると、2001 年までは休止中として記載されていたが、2002 年以降は名簿に名前が記載されていないので、この間に廃部になったと思われる。筆者が記録を確認できた 1998 年の段階では、水沢ラグビースクールと胆沢ラグビースクールは休止中とあったが、1999 年の資料には水沢ラグビースクールの名がなくなったので、この間に廃部になったものとおもわれる。また胆沢もなくなったが、1999 年からは胆江ラグビースクールの名称がみえるので、合併、改称したものと思われる。創設時期は確認できなかった。

1991 年に創立した一関ラグビースクールは、2005 年に最後の 1 人の加入者がいたが、この年を最後に加入者がいない状態が続いていた。2012 年の名簿から名称が消えたので廃部となったと思われる。矢巾ラグビースクールは 2005 年からはじまり、2010 年までは生徒が加入していたが、2011 年からは加入者がいなくなっている。

表 4　ラグビースクールの創設

(年)	スクール名称	出来事
1969	盛岡ラグビースクール	
1970		新日鉄釜石社会人優勝 岩手国体
1974	北上ラグビースクール 大船渡ラグビースクール	
1975	釜石ラグビースクール 宮古ラグビースクール	
1976	都南ラグビースクール	新日鉄釜石日本一
1977		
1978		新日鉄釜石日本一
1979		1984 年まで
1980	水沢ラグビースクール 久慈ラグビースクール	
1991	一関ラグビースクール	
1999	胆江ラグビースクール	
2000	紫波ラグビースクール	
2001		新日鉄釜石ラグビー部が釜石シーウェイブスに
2002		
2003		
2004	滝沢ラグビースクール	
2005	矢巾ラグビースクール	
2006	奥州ラグビースクール	
2007		イーハトーブリーグできる
2008	一関ラグビースクール休止	
2009		
2010		
2011	矢巾ラグビースクール休止	

(b)ラグビースクール数と登録児童数の変遷

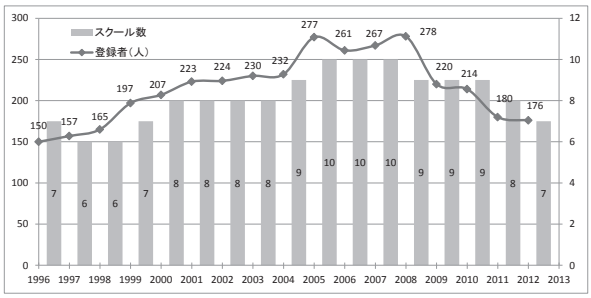

図 1　ラグビースクール数と登録児童数の変遷[8]

ラグビースクール関係資料からスクール数とスクールに登録している児童数を 1996 年から 2012 年までの変化を表したのが図 1 である。2001 年に新日鉄釜石ラグビー部が地域共生型のクラブとして釜石シーウェイブスとなった。その後 2007 年に岩手県のラグビー基盤の強化を目的としたイーハトーブリーグができた。このころは、ラグビースクール数も 2001 年の 8 校から 2007 年の 10 校と増加していたが、ピークは 2005 年で、10 のスクールに 277 名の児童が登録していた。その後 2008 年と 2011 年にスクールが 1 校ずつ減少し、それにともない登録児童数も減少している。

2　岩手県のラグビーの地域性

(1)　ラグビースクールの登録児童数と地域

これまで岩手県ラグビーの歴史的動向をみてきた。ここでは岩手県のラグビー人口の分布がどのようになっているのかをラグビースクール登録児童の分布状況をみてみよう。これを示したのが表 5 である。

表 5 は 2012 年のものである。スクール数は 7 校、登録児童数は 176 人であった。もっとも多いのが北上の 44 名、次いで釜石の 34 名、紫波の 30 名と続いている。

表 5　地域別スクール
登録者数　(2012 年)[9]

スクール	（人）
北 上	44
釜　石	34
紫 波	30
宮 古	20
盛 岡	19
奥 州	15
滝 沢	14
合 計	176

(2)地域別クラブ数

表 6 は地域別クラブ数の変遷を示している。データは、『50 年史』『70 年史』『80 年史』に掲載されたクラブの事務所がおいてある住所から作成した[9]。

表 6 から、1980 年、1999 年、2007 年ともに盛岡がラグビークラブの総数が最も多い。そのほかクラブ数の多い地域は北上、一関、宮古、釜石、滝沢となっている。1980 年から 1999 年にかけて各地でクラブ数が多くなっているのは、新日鉄釜石のラグビー部の活躍の影響が考えられる。ところが 2007 年には各地でクラブ数が減少しているのがわかる。これは、図 1 の 2005 年をピークに登録者数を減少させているラグビースクールと比べると、ピークの年代は不明であるが、全体的な動向としては、クラブ数が減少傾向にあることがよみとれる。

またクラブは、盛岡が最も多い他は、宮古、釜石といった沿岸部、それに紫波、北上といった北上川沿いの諸地域が盛んで、花巻などが盛んになってきているものの、一関

表 6　地域別ラグビークラブ数の変遷

	クラブ			大学・高専			高校			中学校、スクール（中学生）			スクール（小学生以下）			その他			合計		
	1980	1999	2007	1980	1999	2007	1980	1999	2007	1980	1999	2007	1980	1999	2007	1980	1999	2007	1980	1999	2007
久慈・九戸郡	1	1	1					1	1										1	2	2
二戸							1	1	1										1	1	1
西根	1	1	1										1						2	1	1
滝沢	1	3	2		1	2	2	2	2			1							3	6	7
玉山	1										1	1							1	1	1
盛岡	12	23	11	2	2	2	3	5	5	3			2	1	1	1	1	1	23	32	20
紫波	2	4	4				1	1	1			1		1	1				3	6	7
花巻		4	3		1	1								1	1					6	5
北上	3	7	4				3	3	2				1	1	1				7	11	7
水沢（奥州市）	1	5	3				2	2	2					1					3	8	5
胆沢		1					1							1					1	2	
江刺	1	1					2	2	1						1				3	3	2
一関	1	3	2	1	1	0	2	2	2					1	1				4	7	5
西磐井			1																		1
東磐井							1												1		
宮古	3	5	6				4	4	2				1	1	1				8	10	9
上閉伊		1																		1	
下閉伊	1	2	1																1	2	1
釜石	3	7	5				3	2	2			1	1	1	1				7	10	9
陸前高田		2																		2	
気仙沼三陸町				1	1	1													1	1	1
大船渡		1	1				1	1	1				1	1					2	3	2
合計	31	71	45	4	6	6	26	26	22	3	1	4	7	10	8	1	1	1	72	115	86

は減少している。また滝沢は増加している。岩手県北部にはあまりラグビークラブ数が多くはないことがわかる。

おわりに

以上、岩手県のラグビーの歴史的動向とその地域性についてみてきた。1927 年に中学校の体育の授業に取り入れられて以降、ラグビーはさまざまな発展をしてきた、ひとつには、学校でのクラブ活動として発展し、高校では戦後すぐの時期と 1960 年代、そして 1970 年代と 3 度ラグビー部が多く作られた時期がみられた。1970 年には岩手国体が開かれ、これを契機に不惑チームが結成された。また小学生を中心としたラグビースクールも開設された。これは岩手県でも、ラグビーが子どもから大人、そして年を取ってからも楽しむスポーツへと変化したことを示している。

岩手国体が開催されたのち、新日鉄釜石の 7 連覇があった。7 連覇時代の小藪監督が言ったように、7 連覇を支えたのは地元の高校生を主体としたチームであった。そしてそれを支えた地域があった。現在、岩手県のラグビークラブは盛岡のほか沿岸部に多い。それはかつての新日鉄ラグビー部の活躍を身近に感じた人、あるいは新日鉄ラグビー部とかかわりのあった人たちのラグビーとのかかわりが続いていることを示している。

今日、岩手県ではラグビークラブが減少傾向にあるとはいえ、地域別にみると、かつての黄金時代の影響が持続していることがわかる。これは、これからのラグビーのビッグイベントにどのような活力を与えることができるのであろうか。今後の動向が注目される。

【注】

(1) 今日ワールドカップの 15 人制やオリンピックにむけた 7 人制（セブンス）が、話題にのぼっているが、1930 年代にすでに岩手医専が 7 人制東北大会準優勝をしているのが注目される。

(2)奥羽電灯は戦前東北配電に統合、戦後の 1951 年に東北電力岩手支店となった[岩手県ラグビーフットボール協会 1980 : 53]。

(3)松尾鉱山は 1972 年に閉山。(岩手県ラグビー協会 1980 : 123)

(4)この時期実業団チームも復活したり、新たにつくられたりしている。1940 年代後半は、戦争による打撃から徐々に復活していく過程で、戦前からの実業団チームであった国鉄盛岡工場、松尾鉱山が復活する[岩手県ラグビーフットボール協会 1980 : 53]。戦後、国鉄盛岡管理局、国鉄盛岡工機部、東北毛織、県警察学校、盛岡市消防署などの実業団チームがうまれた。しかし数年で活動をやめるものも多かった。そのほか、かつての高等専門学校の同窓生などの OB が集まってできた医専 OB、石桜会、工専 OB や、県庁クラブ、平和クラブ、岩泉クラブ、盛岡サッカークラブといったクラブもみられたが、ひとつの大会への出場を目的にチームが組まれ、大会がおわると解散というものもみられた。戦後間もない 40 年代後半のこの時期にチーム人数をフルでそろえるのは困難だったらしい。1947 年 7 月におこなわれた岩手県 7 人制大会にはこうした多くのチームの参加がみられた[岩手県ラグビーフットボール協会 1980 : 53, 192]。

(5)工専とは、1939 年にできた官立の盛岡高等工業学校（盛岡工高）のことで、1944 年に盛岡工業専門学校となった。工専とはこのときの名称で、その後、岩手大学工学部となっている。農専は農学部、師範学校は教育学部となった。

(6)都南とは、盛岡市の南部にある地域のこと。

小藪修「“70 周年を節目に” 岩手県ラグビーに期待！」（岩手県ラグビーフットボール協会『岩手県ラグビー70 周年記念誌　復活を目指して 1979~1998』）83 頁

(7)筆者インタヴューによるもの。釜石シーウェイブスを応援する複数の人に尋ねた。

(8)岩手県ラグビーフットボール協会が毎年開催しているラグビースクール親善交流大会の第 21 回（1996 年）から第 37 回（2012 年）までの資料も使用して作成

(9)(8)と同じ資料から作成

(10)各年代の住所をもとにしているので、その後の市町村合併は考慮していない。

【参照文献】

岩手県ラグビーフットボール協会
1980『岩手のラグビー五十年史』
1999『岩手県ラグビー70 周年記念誌　復活を目指して』
2007『岩手県ラグビー80 周年記念誌　初心にかえり挑戦』
岩手県立盛岡第一高等学校ラグビー部創部 70 周年記念誌
1998『白堊ラグビー』
岩手県ラグビー協会　ラグビースクール親善交流大会第 21 回（1996 年）から第 37 回（2012 年）のパンフレット
小藪修 1999「“70 周年を節目に” 岩手県ラグビーに期待！」（岩手県ラグビーフットボール協会『岩手県ラグビー70 周年記念誌 復活を目指して 1979~1998』）83 頁

【謝辞】

本研究は、釜石シーウェイブス RFC の大畑勇様、ラグビースクールのコーチの皆様、ご父兄の皆様、釜石市役所の増田久士様、岩手県ラグビー協会の沢口明平様、釜石シーウェイブス RFC 応援の皆様方などいろいろな方にご教示をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。また本論は岩手県立大学地域政策研究センター平成 24 年度後期地域協働研究（地域提案型）「釜石におけるスポーツイベントへむけたラグビー民俗誌の作成」（研究代表者　原英子　釜石シーウェイブス RFC との共同研究）の研究成果の一部を使用しております。